

高校生世代の携帯電話・スマートフォン利用の実態 および推移に関する調査研究

A Study of Use Mobile Phones and Smartphones Among the the High School Students.

毛利康秀¹
Yasuhide MOHRI

¹ 日本大学文理学部 Nihon University, College of Humanities and Sciences

Abstract This paper summarizes the results of a study on how mobile phones are used among high school students in Japan, and have what are their impacts on human relations. It is estimated that the use of mobile phones exerts a great influence of interpersonal relationship among high school students.

キーワード 高校生, 携帯電話, スマートフォン, コミュニケーション

1. はじめに

日本における2016年3月末時点の携帯電話（以下：携帯）、スマートフォン（以下：スマホ）、PHS等の携帯情報端末の契約数は1億5648万700件となっており⁽¹⁾、契約数ベースでは日本の全人口を上回る数にまで達している。内閣府の消費動向調査によると、2016年3月末時点での携帯情報端末の世帯普及率は95.3%⁽²⁾となっており、この数値は近年ほぼ変わらないことから、普及は既に上限に達していると考えられる。幼児や高齢者を除けば、携帯電話は「1人1台」の時代が実現していると言えるだろう。2007年以降はスマホの普及が進んで2016年3月末時点で世帯普及率のうち67.4%を占めており、「ケータイ」から「スマホ」への置き換えが進行している⁽³⁾。

携帯電話はビジネス用途での利用から普及が始まったが、ビジネスのみならずプライベートなコミュニケーションや友人関係にも大きな影響を及ぼすメディアであり、スマートフォンも同様である。その普及初期より、プライベートな部分に着目して携帯電話の利用がコミュニケーション行動や人間関係にどのような影響を与えるかについての調査研究が盛んに行われた。例えば、松田（1998）による「選択縁⁽⁴⁾」や、辻（1999）による「フリッパー＝切替指向⁽⁵⁾」、中島ほか（1999）による「フルタイム・インティメイト・コミュニティ⁽⁶⁾」、中村（2003）による携帯メールにおける「コンビニ的人間関係⁽⁷⁾」など、携帯電話を介した特有のコミュニケーション形態のモデルが提示されている。若者世代を対象とした携帯電話の利用に関する調査研究は引き続き行われており、辻（2006）による人間関係での不安感と携帯メールに関する研究⁽⁸⁾や、下田（2008）による学校裏サイトなど携帯・ネット利用による負の側面に焦点を当てた研究⁽⁹⁾、吉光・河又（2009）によるケータイ・ネット社会における安心・

安全に関する研究⁽¹⁰⁾など、若者世代の携帯・スマホとネットワークに関する問題点と対策に関しての研究の幅が広がっている。携帯・スマホは、人々のコミュニケーションへの欲求に応えられるメディアであり、特にインターネットへの接続が容易になってからは、松下（2012）が指摘するように「絶え間なき交信」を一日中「いつでも、どこからでも」様々な形態で行えるようになっている⁽¹¹⁾。

さて、本発表における問題意識は以下の二つである。

第一は、現在、携帯・スマホはどのように活用されているのか、若い世代、特に高校生世代の間でどのような影響があるのか、という問題意識である。携帯・スマホはプライベートなコミュニケーション行動や友人関係にも影響を及ぼすメディアであり、人間関係を「より広く」と同時に「より深く」親密な関係を築いていく特性を併せ持つメディアでもある。近年は無料で通話やメールの交換（あるいは文字メッセージの交換）が出来ると謳われるアプリケーションソフト（アプリ）の普及が進んでおり、特に現在は若い世代のほとんどが「LINE」を利用しているなど、利用環境が大きく変わりつつある。現在の高校生世代は、携帯・スマホをどのように使いこなし、コミュニケーションや人間関係の構築に活かしているのだろうか。

第二は、携帯・スマホの普及に伴い、その利用実態にどのような変化が生じてきたのか、という問題意識である。これまで、利用状況に関する調査研究が数多く行われ、知見の蓄積も進んでいる。ただ、それら先行研究で明らかにされた成果は、それぞれの時点における一度限りの調査に基づいたものであり、普及時期の違いによる調査結果を比較検討したものは少ない。これまでに蓄積されてきた諸研究の知見は、現在そして今後も引き続き当てはまるのであろうか。

以上の問題意識を検討するには、携帯電話の普及途

上期に実施された利用実態調査を採り上げ、これと可能な限り条件を合わせた利用実態調査を普及が進んだ時期にも実施し、両者の結果を比較することが有効であると考え。

筆者は1998年度から同一の高校を対象として3年おきに携帯・PHS・スマホの利用実態に関する事例調査を行っており、その結果を比較することで利用状況の変化について検討を試みることにした。

2. 調査方法

調査対象は、日本大学の付属高等学校の1校で、同一高校で入学・卒業年度の異なる1学年全員とし、3年おきに6世代にわたって実施した。本稿では、1998年に高校へ入学した生徒を1998年世代、2001年に高校へ入学した生徒2001年世代というように表記する。詳細は以下の通りである。

- 1998年世代…1998年4月入学～2001年3月卒業
- 2001年世代…2001年4月入学～2004年3月卒業
- 2004年世代…2004年4月入学～2007年3月卒業
- 2007年世代…2007年4月入学～2010年3月卒業
- 2010年世代…2010年4月入学～2013年3月卒業
- 2013年世代…2013年4月入学～2016年3月卒業

調査方法は、アンケート用紙の配布による自記式調査で、携帯電話（PHS）の利用状況、利用頻度・回数、友人数、利用に関する意識について等について質問した。2010年世代については、スマートフォンを使用しているかどうか、ならびに使用状況の詳細についても質問した。調査時期は、それぞれ高校3年在学時に実施した。詳細は以下の通りである。

- 1998年世代…2000年9月 2001年世代…2004年2月
- 2004年世代…2006年12月 2007年世代…2010年2月
- 2010年世代…2012年12月 2013年世代…2015年11月

アンケート調査票の回収分のうち白紙回答など無効票を除外した有効回答ならびに在籍者に対する有効回答率は以下の通りである。

- 1998年世代…在籍者642、有効回答574（男子421、女子153）回答率89.4%
- 2001年世代…在籍者684、有効回答588（男子395、女子193）回答率86.0%
- 2004年世代…在籍者662、有効回答546（男子348、女子198）回答率82.5%
- 2007年世代…在籍者520、有効回答454（男子298、女子156）回答率87.3%
- 2010年世代…在籍者474、有効回答424（男子284、女子140）回答率89.5%
- 2013年世代…在籍者368、有効回答309（男子203、女子105）回答率83.7%

調査の集計にあたっては、まず新しい2013世代の利用状況についてまとめ、続いて1998年世代からの推移を比較・検討する。

3. 調査結果の概要（2013年世代の利用状況）

調査時点において、携帯・スマホを利用しているかどうかについて質問し回答を集計すると、〈表1〉のようになった。2013年に高校へ入学した世代は、高校3

年の12月時点（2015年11月の時点）で男子は回答者の99.5%、女子は100%が使用している。利用していないのは男子1名となっている。使用している機種については、女子1名が従来型携帯を使っているほかは全員がスマホを使用している。なお、2010年世代でのスマホ利用率は男子152人（53.5%）女子79人（56.4%）とほぼ半々であったが、3年の間でほぼ完全にスマホに入れ替わった形となっている。

〈表1〉携帯・スマホの使用状況(2013年世代)

	男子			女子		
	人	%	%	人	%	%
1スマートフォンを使用	203	99.5%	99.5%	104	99.0%	100.0%
2携帯電話を使用	0	0.0%		1	1.0%	
3PHSを使用	0	0.0%		0	0.0%	
4使用していない	1	0.0%		0	0.0%	
	204			105		

携帯・スマホの利用開始時期について質問し、学年別に集計すると〈表2〉のようになった。小学生卒業までの利用は、男子は8.0%、女子は24.7%であるが、中学入学を契機に利用者が増え、中学卒業から高校入学の時期に一気に行き渡っていることが分かる。世代別の比較のところでも後述するが、中学卒業から高校入学にかけての時期から携帯・スマホを使い始める例が多く、その傾向が定着しつつある。

〈表2〉携帯・スマホの使用開始時期(2013年世代)

	男子		女子	
	人	%	人	%
幼稚園以前から使用	0	0.0%	0	0.0%
小学1年生から使用	2	1.0%	0	0.0%
小学2年生から使用	0	0.0%	0	0.0%
小学3年生から使用	6	3.0%	8	7.6%
小学4年生から使用	2	1.0%	6	5.7%
小学5年生から使用	3	1.5%	6	5.7%
小学6年生から使用	3	1.5%	6	5.7%
中学1年から使用	27	13.3%	13	12.4%
中学2年から使用	13	6.4%	6	5.7%
中学3年から使用	100	49.3%	48	45.7%
高校1年から使用	44	21.7%	11	10.5%
高校2年から使用	3	1.5%	0	0.0%
高校3年から使用	0	0.0%	1	1.0%
合計	203	100.0%	105	100.0%

インターネット上には携帯・スマホで利用可能な様々なサービスが提供されているが、それらのサービスの利用状況について質問したところ、〈表3〉のようになった。この結果によると、LINEはほぼ全員が利用している。LINEは2011年6月にサービスが始まり、2010年世代の利用率は男子138人（49.5%）、女子81人（57.9%）であったが、現時点においてLINEは高校生世代にとって必須のコミュニケーションツールになっていると解して良い。動画サイトは男女とも利用者が多く、ゲーム系のアプリは男子が、Twitterは女子の方が多く傾向が認められる。社会人の間で利用が進んでいるFacebookの利用者は20%前後と多くない。Facebookは基本的に実名での登録が必要で、ビジネスで利用される機会も多いことから、高校生世代の利用にはあまり馴染まないものであると考えられる。MobageやGREEの利用者は少なく、ゲームはスマホでのゲームアプリが主流となっている。

＜表3＞利用しているサービス(2013年世代)

	男子		女子	
	人	%	人	%
LINE(ライン)	200	98.5%	104	99.0%
動画サイト(Youtube、ニコニコ動画など)	164	80.8%	88	83.8%
ゲーム系アプリ(パズドラ、ドラクエなど)	147	72.4%	56	53.3%
Twitter(ツイッター)	140	69.0%	84	80.0%
Facebook(フェイスブック)	42	20.7%	21	20.0%
Skype(スカイプ)	37	18.2%	13	12.4%
他のコミュニケーション系アプリ(カカオトークなど)	31	15.3%	22	21.0%
他の情報系アプリ(グノシー、バイトルなど)	24	11.8%	12	11.4%
Mobage(モバゲー)	14	6.9%	5	4.8%
GREE(グリー)	12	5.9%	4	3.8%
これら以外で、よく利用するサービス・アプリ	15	7.4%	10	9.5%

1日あたりの利用状況について質問し、回答者の平均について集計したところ、＜表4＞のようになった。通話については、携帯・スマホ本来の通話機能とLINEの通話機能、その他アプリの通話機能を分けて集計し、文字メッセージの交換についても、携帯・スマホ本来のメール機能とLINEのトーク機能、その他アプリの同等の機能を分けて集計した。これによると、通話ならびに文字メッセージの交換ともLINEの利用の方が多くなっていることが分かる。なお、2010年世代における通話および文字メッセージの交換は下の補足以下の通りであり、特に携帯・スマホ本来のメールの利用が大幅に減少している。2013年世代における文字メッセージの中心はLINE上で行われていると判断して良い。

その他の利用状況では、男子はゲーム機としての利用が多く、女子は音楽プレイヤーとしての利用が多くなっている。

＜表4＞1日あたりの平均利用時間(2013年世代)

	男子		女子	
	回数	分	回数	分
通話	電話	1.0回 3.4分	1.0回 8.0分	
	LINE	0.8回 8.4分	1.2回 27.2分	
	その他アプリ	5.0分	7.7分	
文字	メール	1.7回 4.2分	2.8回 4.4分	
	LINE	31.7回 36.4分	57.9回 85.2分	
	その他アプリ	9.3分	42.0分	
ゲーム等	86.7分	65.9分		
動画サイトの視聴	51.6分	65.0分		
音楽の視聴	41.2分	80.9分		
情報アプリ等	5.6分	9.1分		
その他機能・サービスの利用	4.8分	18.3分		
単純合計	256.7分	413.7分		

補足：2010年世代の通話および文字メッセージの利用状況
 通話 男子 1.4回・7.6分 女子 1.1回・7.2分
 LINE通話 男子 1.1回・7.2分 女子 0.6回・10.4分
 メール 男子12.8回・32.4分 女子13.3回・30.5分
 LINE文字 男子51.0回・51.2分 女子67.1回・54.8分

携帯・スマホのアドレス帳、LINEに登録している連絡先の登録数(友達の登録数)について質問・集計すると＜表5＞のようになった。この結果によると、男女ともLINEの友達登録数の方が上回る結果となっている。

アドレス帳とLINEの友達登録数のうちどちらが多いかについて集計すると＜表6＞のようになり、やはり男女ともLINEのそれが上回っている。LINEを導入する時、携帯・スマホのアドレス帳を取り込む機能があるが、その後の連絡先の追加はLINEの方が活発に行われていることを表している。この点からも、2013年世代における携帯・スマホを通したコミュニケーションはLINE

が中心的存在になっていることが分かる。

＜表5＞連絡先の登録数(2013年世代)

	男子	女子
アドレス帳の登録数	69.1人	75.1人
LINEの友達登録数	91.4人	84.5人
どちらが多い方の平均	93.0人	99.5人

＜表6＞アドレス帳とLINEの友達登録数(両方の回答者)

	男子		女子	
	人数	%	人数	%
アドレス帳の方が多い	41	24.1%	40	40.0%
LINEの方が多い	85	50.0%	43	43.0%
同数	44	25.9%	17	17.0%
回答者の合計	170	100.0%	100	100.0%

LINEにはコミュニケーションを円滑にするツールとしてスタンプが活用されているが、有料スタンプを購入したことがあるかどうかについて質問・集計すると＜表7＞のようになった。なお、全体の平均は男子が2.6個、女子は4.9個となっている。この結果によると、男子の半分、女子は7割弱が購入の経験があり、一般的に女子の方が多い傾向が出ている。

＜表7＞LINEのスタンプ購入数(2013年世代)

	男子		女子	
	人数	%	人数	%
0個	85	41.9%	31	29.5%
1～2個	39	19.2%	12	11.4%
3～4個	32	15.8%	20	19.0%
5～6個	15	7.4%	15	14.3%
7～8個	4	2.0%	6	5.7%
9～10個	7	3.4%	7	6.7%
11～30個未満	2	1.0%	10	9.5%
30個以上	1	0.5%	1	1.0%
無回答	18	8.9%	3	2.9%
合計	203	100.0%	105	100.0%

一ヶ月あたりの利用料金が幾らくらいになるかについて質問・集計したところ、＜表8＞のようになった。これは基本料金や各種サービスの利用料金を含めた支払金額総額として質問している。この結果によると、男子よりも女子の方が多くなっている。ただし、ゲームアプリ等の利用で課金しているのは男子の方が多く、その金額も高額になっていることが注目される。

＜表8＞一ヶ月平均の利用金額(2013年世代)

	男子		女子	
	人数	%	人数	%
5000円未満	18	8.9%	6	5.7%
5000円～6000円未満	27	13.3%	10	9.5%
6000円～7000円未満	27	13.3%	9	8.6%
7000円～8000円未満	11	5.4%	9	8.6%
8000円～9000円未満	17	8.4%	18	17.1%
9000円～10000円未満	5	2.5%	1	1.0%
10000円～15000円未満	40	19.7%	24	22.9%
15000円以上	8	3.9%	6	5.7%
無回答	50	24.6%	22	21.0%
合計	203	100.0%	105	100.0%

平均	7,764円	8,277円
アプリ課金を除く平均	7,292円	8,198円
アプリ課金者	21人(10.3%)	10人(9.5%)
アプリ課金者の平均	3,438円	658円

4. 調査結果の概要（世代別の推移）

続いて、携帯（PHS含む）・スマホの利用状況について調査時期の違いによる世代別の比較・検討を行う。

まず、携帯・スマホをいつ頃から利用していたかについて集計すると、〈表9〉のようになった。概ね、男女別では女子の方が高い利用率を示しており、世代別では時期が下るほど高くなっていることが分かる。現在の高校生世代は、ほぼ全員が携帯・スマホを利用していると言えるが、少数ながら利用しない生徒も存在し続けていることには留意しておく必要がある。

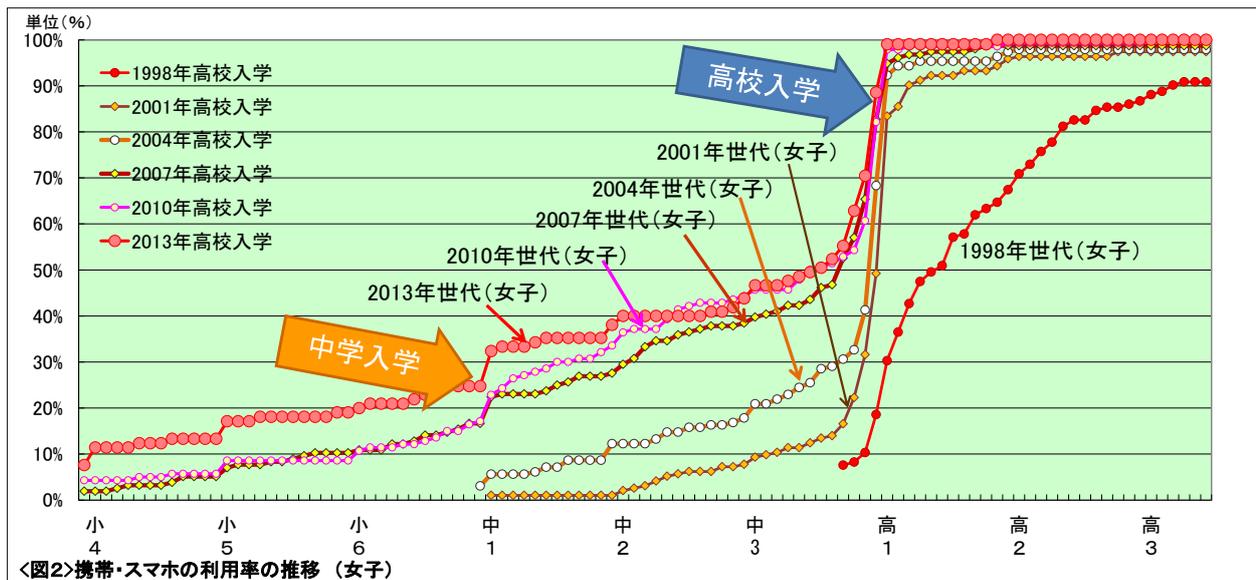
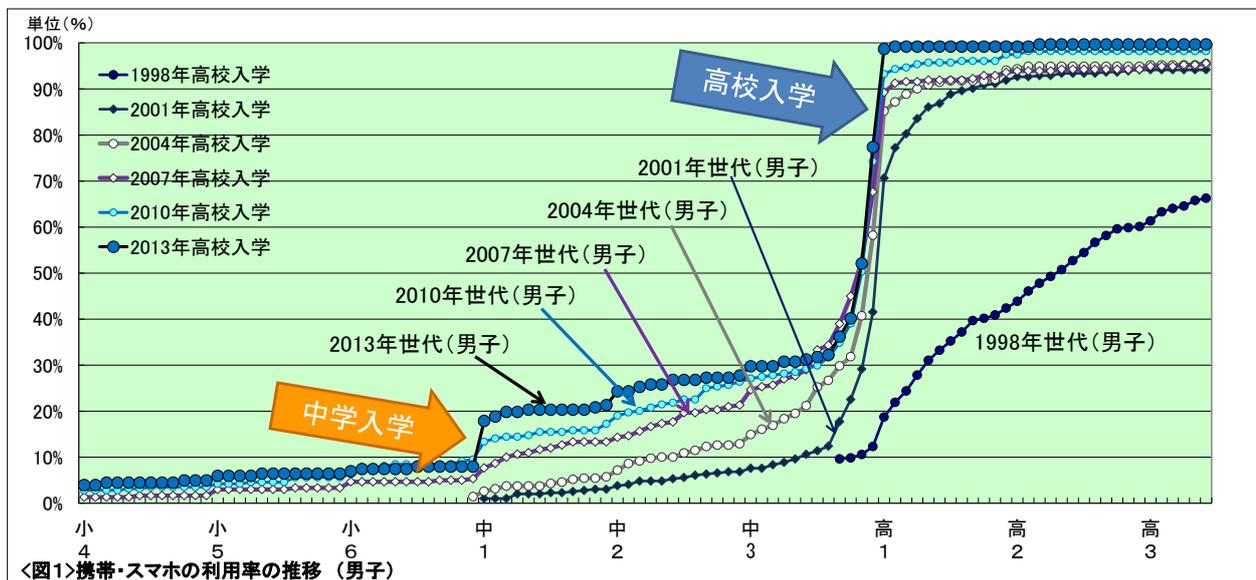
この利用状況について、利用率がどのように上昇していったかを1ヶ月ごとに時系列に集計してグラフに表すと男子は〈図1〉、女子は〈図2〉のようになった。

これらのグラフを見ると、「女子の方が高い利用率を示している」「世代が下るほど利用率が高く、特に中学以前からの利用が高くなっている」傾向が見いだされる。携帯電話が普及途上であった1998年に高校へ入学した世代では、入学後、高校生活を送りながら緩やかに利用率が増えていったが、2001年に入学した世代以降は、高校入学の前からで一斉に使用し始めている。そして、世代を下るほど中学生の時期からの利用

〈表9〉携帯・スマホ(PHSを含む)の利用率の推移

	中1の4月	中2の4月	中3の4月	高1の4月	高2の4月	高3の4月	
1998年世代 男子	0.0%	1.1%	6.6%	18.7%	43.9%	61.3%	n=421
2001年世代 男子	1.0%	3.8%	7.6%	70.6%	92.7%	94.2%	n=395
2004年世代 男子	2.6%	7.2%	14.9%	85.2%	94.4%	95.2%	n=348
2007年世代 男子	7.7%	14.3%	24.6%	89.3%	93.9%	94.9%	n=298
2010年世代 男子	13.4%	19.0%	27.1%	93.3%	97.5%	98.2%	n=279
2013年世代 男子	17.9%	24.3%	29.8%	98.7%	99.2%	99.7%	n=203
1998年世代 女子	0.0%	1.9%	5.1%	30.3%	70.9%	88.1%	n=153
2001年世代 女子	1.0%	2.1%	9.3%	83.4%	96.4%	97.4%	n=193
2004年世代 女子	5.6%	12.2%	20.9%	92.3%	97.9%	97.9%	n=198
2007年世代 女子	22.4%	29.5%	39.7%	94.9%	98.7%	98.7%	n=156
2010年世代 女子	22.9%	36.4%	45.7%	97.9%	99.3%	100.0%	n=156
2013年世代 女子	32.4%	41.9%	46.7%	99.0%	100.0%	100.0%	n=105

入学した世代では、入学後、高校生活を送りながら緩やかに利用率が増えていったが、2001年に入学した世代以降は、高校入学の前からで一斉に使用し始めている。そして、世代を下るほど中学生の時期からの利用



が増えているが、その上昇カーブは緩やかになっている。その意味において、高校生世代は携帯・スマホの利用がほぼ全員行き渡る最初の世代とも言える。

高校3年時の、それぞれの調査時における、携帯・スマホの1日あたりの通話機能（LINEを含む）の利用回数および時間は<表10>のようになった。男女別に見てみると、通話時間は女子の方が長い傾向にあることが認められる。これは、女子の方がいわゆる「おしゃべり」の長電話が多く、全体の平均を引き上げているからではないかと考えられる。世代別では、1998年に高校へ入学した世代は比較的高頻度・長時間の利用が見られ、その後の世代の利用は減少しているが、特に2013年世代の女子で増えている。LINEの無料通話機能を使って親しい相手（特定の交際相手）と長時間おしゃべりをするのが容易になったためと考えられる。

<表10>通話機能の1日平均利用回数・分数

	通話回数(回)	通話分数(分)
1998年世代 男子	2.7 回	21.7 分
2001年世代 男子	1.4 回	6.2 分
2004年世代 男子	2.1 回	13.6 分
2007年世代 男子	1.3 回	13.2 分
2010年世代 男子	2.6 回	20.4 分
2013年世代 男子	1.8 回	16.8 分
1998年世代 女子	2.3 回	35.0 分
2001年世代 女子	0.9 回	6.9 分
2004年世代 女子	2.5 回	17.0 分
2007年世代 女子	1.4 回	18.8 分
2010年世代 女子	1.7 回	15.6 分
2013年世代 女子	2.2 回	42.8 分

1日あたりの文字メッセージの交換（LINEのトークを含む）の利用回数および時間は<表11>のようになった。（文字メッセージの送受信および文面作成の時間を含んでいる）長期的な傾向を見た場合、メールの利用回数・分数は、男女とも1998年に高校へ入学した世代から増加傾向にある。特に、LINEを中心とした文字メッセージの交換が可能なアプリを活用して廉価に利用出来る機会の増大が影響していると考えられる。

<表11>文字メッセージ交換の1日平均の回数・分数

	文字交換回数(回)	文字交換分数(分)
1998年世代 男子	5.7 回	13.6 分
2001年世代 男子	19.2 回	27.7 分
2004年世代 男子	25.3 回	47.7 分
2007年世代 男子	20.0 回	44.9 分
2010年世代 男子	37.5 回	58.6 分
2013年世代 男子	33.4 回	49.8 分
1998年世代 女子	7.3 回	25.4 分
2001年世代 女子	17.9 回	28.0 分
2004年世代 女子	31.5 回	83.2 分
2007年世代 女子	21.3 回	52.0 分
2010年世代 女子	49.7 回	59.1 分
2013年世代 女子	60.7 回	131.6 分

高校3年時の、それぞれの調査時における、1ヶ月あたりの利用料金（基本料金込み）について質問すると、<表12>のようになった。利用料金は電話会社による違いや料金体系の違いがあるほか、時期によっても料金水準は異なるため単純な比較は出来ない。しかし、

高くても1万円を超えることなく、高校生として支払いが可能な金額としては、おおよそ1ヶ月あたり7000円～8000円台が標準的なのであろうと考えられる。

もちろん、この結果をもって直ちに一般化することは出来ないが、高校生世代が（高校生世代を持つ保護者が）経済的に支出可能な金額は、時代が変わっても概ねの水準に収まっている様子がうかがえる。

<表12>月々の利用料金(円)

	料金(円)
1998年世代 男子	8,294 円
2001年世代 男子	9,815 円
2004年世代 男子	7,976 円
2007年世代 男子	7,658 円
2010年世代 男子	7,218 円
2013年世代 男子	7,764 円
1998年世代 女子	8,310 円
2001年世代 女子	9,644 円
2004年世代 女子	8,642 円
2007年世代 女子	8,505 円
2010年世代 女子	7,833 円
2013年世代 女子	8,277 円

携帯・スマホのアドレス帳は、その人が意識する友人関係の範囲が反映されているものと考えられる。高1終了時点、高2終了時点、高3の調査時点における登録人数について質問し、その推移を集計したところ<表13>のようになった。全体的に、学年が上がるにつれて登録人数も増加していく傾向が見られる。ただ、2013年世代ではアドレス帳の登録数よりもLINEの友達登録数の方が多くなる現象が起きており、これも考慮すれば連絡可能な人数はさらなる増加傾向にある。それでも、少なくとも現時点までの状況では多くても100名前後にとどまっており、高校生が維持することの出来る平均的な人間関係の範囲は、おおよそ80名～100名前後のところにありと考える。

<表13>アドレス帳の登録人数(人)

	高1時点	高2時点	高3時点
1998年世代 男子	51 人	90 人	92 人
2001年世代 男子	67 人	81 人	95 人
2004年世代 男子	60 人	80 人	85 人
2007年世代 男子	62 人	81 人	102 人
2010年世代 男子	65 人	78 人	89 人
2013年世代 男子	64 人	69 人	69 人
1998年世代 女子	58 人	89 人	82 人
2001年世代 女子	69 人	83 人	90 人
2004年世代 女子	73 人	90 人	104 人
2007年世代 女子	68 人	82 人	93 人
2010年世代 女子	68 人	78 人	87 人
2013年世代 女子	67 人	71 人	75 人

親しいと感じる人数の推移は<表14>のようになった。携帯の普及期（1998年世代）は、男女とも絶対数が少なく、学年が上がるにつれて減少していく傾向が認められる。普及が進むと男女とも絶対数が多くなっている。高校3年になると若干絞り込まれる傾向も認められる。落合の研究によると、高校生はもともと「広く深く付き合う」友人関係を志向する時期ではあるが、次第に友人の範囲が絞り込まれていくという（1996 :

65)。今回の調査結果を見ても、概ねこの見解に合致しており、アドレス帳への登録人数が増加していても、親しいと感じる人数まで増加し続ける訳ではないことが示唆される。

＜表14＞親しいと感じる人数の推移(人)

	高1時点	高2時点	高3時点
1998年世代 男子	28人	17人	17人
2001年世代 男子	57人	67人	57人
2004年世代 男子	50人	68人	62人
2007年世代 男子	54人	70人	72人
2010年世代 男子	58人	74人	65人
2013年世代 男子	66人	70.3人	65人
1998年世代 女子	24人	14人	12人
2001年世代 女子	52人	61人	38人
2004年世代 女子	54人	62人	56人
2007年世代 女子	40人	47人	44人
2010年世代 女子	41人	46人	53人
2013年世代 女子	46人	51人	37人

5. まとめ

かつての携帯電話は文字通り持ち運びが出来る「移動式の電話」であり、「通話するもの」という考えが残っていたが、スマホの利用が主流となり、通話機能以外にも多様な使い方が出来るようになった。この変化に合わせ、高校生世代においても、世代が下るにつれて通話やメール以外の利用が増えている。特にLINE等のアプリを利用した通話や文字メッセージの交換は短期間で大きな変化を見せている。続く世代ではどのように利用されるのかについても注目していきたい。

利用開始時期については、高校に入学してから携帯電話を使い始める割合が多かく、時代が下るにつれて使用開始時期が早まっているが、一定の頭打ちの傾向も認められる。

アドレス帳の登録人数は、世代別の差があまり見られなかった。先行研究によって明らかにされたように、携帯電話は人間関係を「より広く」「より深く」するメディア的特性を持っているが、1日が24時間と決まっており、自由に使える時間にも限度がある以上、人間関係をどこまでも広げていくことは出来ないし、深めていくことも困難である。これは、携帯・スマホを活用したとしても人間関係の拡大には一定の限度があることを示唆しているのかもしれない。今後も携帯・スマホを活用した人間関係やコミュニケーションのあり方について、さらなる考察を深めていきたい。

補注

- (1) 一般社団法人電気通信事業者協会が発表した事業者別契約数より。PHSも含む。<http://www.tca.or.jp/database/>
- (2) 内閣府「消費動向調査」2016年3月末現在の発表より。
<http://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/shouhi.html>
- (3) 同 2016年3月末現在の発表より。
- (4) 「選択縁」とは、話す相手を意識的に選択し、選べる縁を一層選択的に選び抜いた関係である。
- (5) 対人フリッパーとは、対人関係に全面的に拘束されることを嫌い、テレビのチャンネルを切り替えるように人間関係のオン・オフを自在に切り替えるコミュニケーション形態であるとしている。
- (6) 例えば、昼間は対面で話をし、別れてからは携帯電話で話を

し、帰宅したら固定電話で話をするといった、一日中何らかの形で連絡を取り合っているような関係である。

- (7) 携帯電話のメール(相手の事情を気にせず、24時間好きな時に連絡をとれる)ことに慣れてしまうと、孤独に耐えたり自己を見つめたりする機会が奪われるのではないかと指摘している。
- (8) 辻は、調査分析の結果から、携帯メールの利用頻度と孤独不安とが正の相関を示しており、関係性の流動化による社会的不確実状況への適応として、関係性への敏感さが求められつつ、そのことがまた関係性の不安の感じやすさにつながっているものと解釈できる、と論じている。
- (9) 下田によると、学校裏サイトは2002年頃からその存在が確認されており、2007年時点で約1万5000もの学校裏サイトが存在していると推計している。
- (10) 吉光・河又によると、携帯電話やインターネットの利用で作られる人間関係が、家庭や学校以外の場所における安心感や自尊心を高める効果を持っている一方、家庭や学校での安心感にマイナスの影響をもたらすことが明らかになったという。
- (11) 松下によると、特に携帯電話のメール機能が「絶え間なき交信」を実現させているが、同時に「絶え間なき交信」はコミュニケーションの強制や返信がないことへの不安も生み出されている、とも指摘している。

参考文献

- 1) 落合良行・佐藤有耕(1996):青年期における友達とのつきあい方の発達的变化,『教育心理学研究』44(1), 日本教育心理学会, pp.55-65.
- 2) 松田美佐・富田英典ほか(1998):移動体メディアの普及と変容,『東京大学社会情報研究所紀要』56, 東京大学社会情報研究所, pp.89-107.
- 3) 辻大介(1999):若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア,『子ども・青少年とコミュニケーション』, 北樹出版.
- 4) 中島一郎・姫野桂一ほか(1999):移動電話の普及とその社会的意味,『情報通信学会誌』59, 情報通信学会, pp.46-73.
- 5) 中村功(1999):電話コミュニティーその実態とコミュニケーションの重層性について一,『松山大学論集』11(4), 松山大学学術研究会, pp.307-328.
- 6) 辻泉(2003):携帯電話を元にした拡大パーソナル・ネットワーク調査の試みー若者の友人関係を中心に,『社会情報学研究』(7), 日本社会情報学会, pp.97-111.
- 7) 中村功(2003):携帯メールと孤独,『松山大学論集』14(6), 松山大学学術研究会, pp.85-116.
- 8) 辻大介(2006):つながりの不安と形態メール,『関西大学社会学部紀要』37(2), pp.43-52.
- 9) 毛利康秀(2007):高校生世代における携帯電話の利用実態に関する比較分析,『日本社会情報学会 第22回全国大会研究発表論文集』pp.82-85.
- 10) 下田博次(2008):『学校裏サイト』, 東洋経済新報社.
- 11) 吉光正絵・河又貴洋(2009):ケータイ・ネット社会における安心・安全に関する研究ー長崎県下の高校生の利用実態と対応一,『日本社会情報学会全国大会研究発表論文集』24, pp.64-67.
- 12) 松下慶太(2012):若者とケータイ・メール文化,『ケータイ社会論』, 有斐閣.
- 13) モバイル社会研究所編(2012):『ケータイ社会白書 モバイル・コミュニケーション 2012-13』, 中央経済社.